白隠禅師坐禅和讃

なり　とのくにて

をれてなく　のになし

きをらずして　くむるはかなさよ

えば水の中に居て　を叫ぶが如くなり

ののとなりて　ににならず

のは　がのなり

にをみそえて　いつかをるべき

れのは　するに余りあり

やの

そのき　このにするなり

のをなすも　みしのほろぶ

いずくにりぬべき　ちからず

なくもこのを　たびにふるる

するは　をることりなし

んやらして　にをすれば

ちにて　にをれたり

のひらけ　のし

のをとして　くもるもならず

のをとして　うもうもの

のひろく　のさえん

のをかむべき　するに

ち　このちなり